

した。跳躍台の上には報酬飼料を置いた。跳躍台の横に同じ高さののぼり台を設置し、サルがのぼり台から跳躍台に飛び移って餌を得る行動を利用して、幅跳びの能力を測定した。試行が進むごとに台の間隔を徐々に広げた。その結果、2歳と3歳の個体が2.2mの距離を飛ぶことができた。

(3) 自由研究

2 獺区と非獺区にすむ野生ザル群の擬似獺師獺犬ペアに対する逃避反応の差異

伊沢紘生（帝京科学大）

対応者：渡邊邦夫

3 サルにおける冠状動脈の分岐様式

下高原理恵、島田和幸（鹿児島大・院・歯科応用解剖）、島田達生（大分大・医）

対応者：遠藤秀紀

サンプル提供がなく、本研究計画は未実施。

4 顔運動情報処理の発達過程とその脳内機序の解明

土居裕和（長崎大・院・医歯薬）

対応者：正高信男

表情認識や人物の同定など、顔認知能力の発達は、社会的認知の発達の要である。一方、近年、これらの認知過程において、顔の運動情報が重要な役割を果たしている可能性が指摘されてきた。しかし、顔認知の発達に関する既存の研究は、静止した顔の認知に焦点をあわせており、顔の運動情報処理の発達に関する体系的な研究はほとんどない。そこで、ヒト乳幼児を対象として、表情表出および構音に伴う顔の運動情報認知の発達過程を行動実験により検討した。その結果、運動情報に基づく表情認知能力の幼児期における発達パターンは、表情カテゴリーに依存して異なる経過を辿ることが確認された。また、生後6ヶ月の時点で、すでにポイントライトディスプレイ表示された構音運動と、音韻情報とをマッチングできる可能性が示唆された。

一方、ヒトの身体運動認知および、顔の運動によって生起する社会的情報のひとつである視線方向知覚を司る脳内機序を、事象関連電位（ERP）を指標として検討した。その結果、身体運動認知における motion signal の役割や、視線方向知覚における大域的情報処理に関して新たな知見を得ることが出来た。

5 ニホンザル新生児における匂い刺激によるストレス緩和効果

川上清文（聖心女子大・心理）

対応者：友永雅己、鈴木樹理

筆者らはニホンザル新生児が採血を受ける場面に、ホワイトノイズやラベンダー臭を呈示するとストレスが緩和されることを明らかにした。